

## 史跡と名所

### 心合寺山古墳

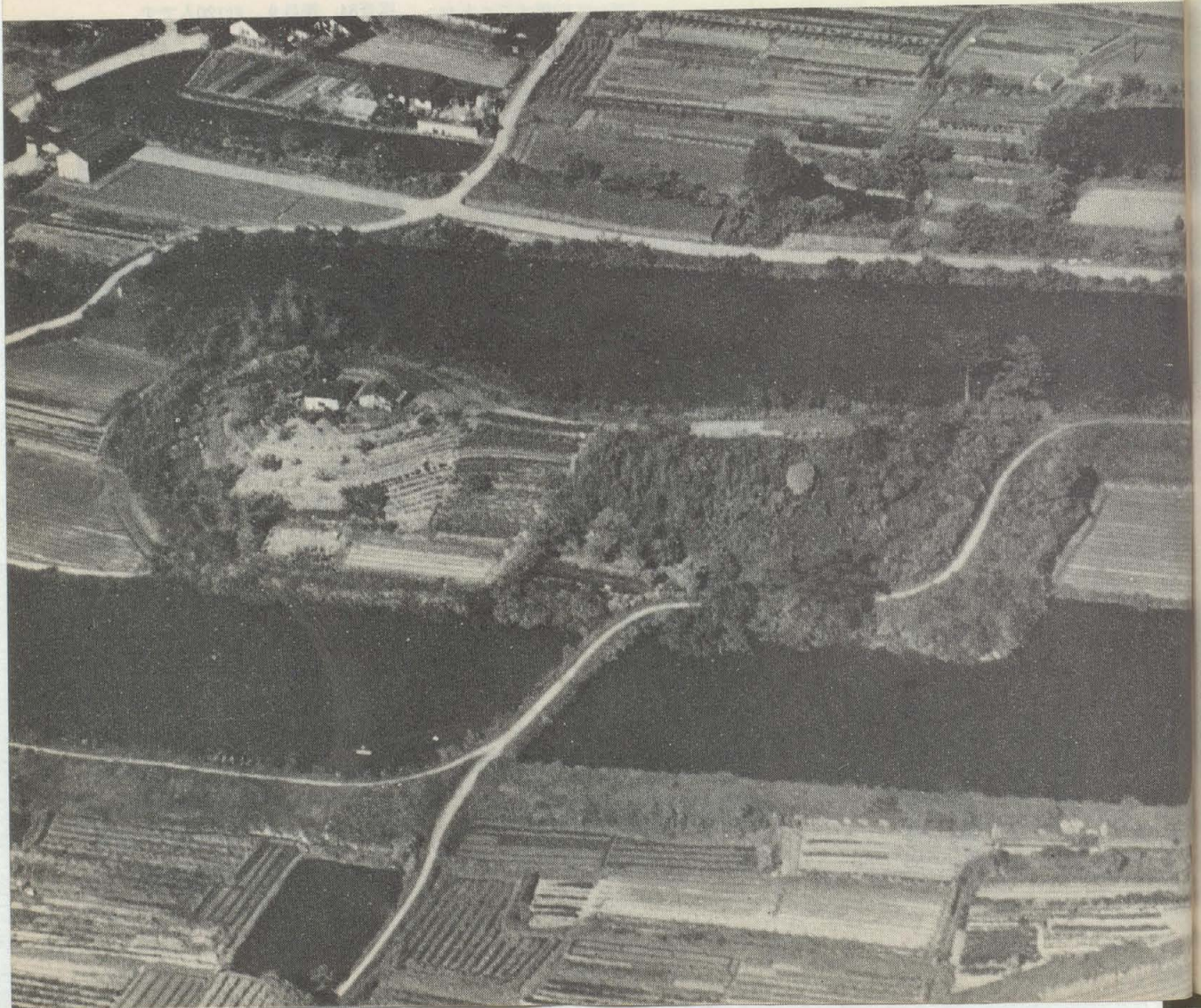
心合寺山古墳（シオンジヤマコフン）は、市の東部山麓、大竹部落の西北方、標高約30㍍の緩傾斜面にある南向の前方後円墳で、南北の長さ約130㍍、後円部の経47㍍、高さ11㍍、前方部の幅56㍍、その高さ8㍍、全周に段状の濠がある市内で最も大きい古墳です。墳丘はいまでは開墾されて畑になっていて、埴輪円筒の破片や葺石と思われる平面な石が散らばっています。この古墳の遺物、内部構造については、何も聞き伝えがありませんが、恐らく堅穴に石棺が納まっていたものでしょう。

この古墳の前方は長くのびて後円部径の2倍近くになっています。この古墳は形や場所からみて最盛期である中期の遺物でありましょう。

この外、当市内には600余の古墳があり、市内の高安地区にかたよって存在しています。その位置を東西の高低からみると5区に分けられます。第1区—標高15~20㍍—この間の西端は東高野街道で古墳はここから始まっています。第2区—20~50㍍—心合寺山、千塚などがあるが数は少ない。第3区—50~100㍍—数は急にふえて、西ノ山、花岡山、向山などがあり、特に大窪、山畑、服部川、郡川の領域に横穴式円墳が群集しています。第4区—100~150㍍—核山、開山塚などがあって数的には最高。第5区—150~200㍍—神立から郡川までの間は相当数存在しますが、これから東へ登るにしたがって、数は急に減り、350㍍のところでは全くなくなります。

これらの古墳は、その外形からみて、円墳と前方後円墳とがあり、内部の構造から堅穴式と横穴式に分けることができます。そしてその99%までは横穴式古墳で、前方後円墳は5指を数えるだけです。

空からみた心合山古墳の全景







顯 証 寺

顯 証 寺 (久宝寺)

真宗本派の別院格で別名久宝寺御坊と呼ばれ、河内11郡の末寺を統轄していた巨刹である。その前身は西証寺と称し、蓮如第11男実順が住んでいた。処が実順若くして遷化し後嗣がなかつたので、享禄2年10月近江国大津三井寺の南別所近松の近松山顯証寺に在住していた蓮如第6男の蓮淳を寺号もるとも当地へ移り住せしめた。建築面積総計3,000平方メートル、近年まで後庭には江戸末期に作庭されたという茶屋含月軒があった。堂宇は宝永7年4月に再建されたものである。

大 信 寺 (八 尾)

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれ真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によって慶長12年3月に建立された。本堂は棟行17間、梁行15間、その広間書院庫裡太鼓楼等の大建物が聳えていた。書院の襖24枚は円山応挙の筆と伝えられている。天明8年正月本山本堂炎上の際はこの本堂を解体、京都に引移し、その後寛政11年2月還付され再び当地に建った。同寺庭園は顯証寺庭園と共に書院庭として名高い。作庭年代は江戸初期と伝えられ、細長く広大な池泉を配し、これに橋が架けてあった。昭和28年3月3日突如本堂大屋根が落ち今は往時をしのぶよすがもない。建築面積は本堂850平方メートル、総坪数1ヘクタール。

お 連 夜 市

毎月11日と27日盛な露天市が行われている。この露天市は久宝寺御坊と八尾御坊との間約1キロメートルに亘り店が張られ、お連夜市といわれこの両寺院に関係が深い。お連夜は忌日又は命日の前日で例月27日は親鸞上人の連夜に相当し、両寺院ではその法要を盛大に厳修するので、近郷の善男善女が多く参詣し法話を聴聞する人が群集する処商人また集り沿道に店を張るようになったのであろう。この市は古く織田、豊臣の時代から続いているようである。

大 聖 勝 軍 寺 (太子堂)

草創は聖徳太子と伝えられ、俗に下の太子と呼んでいる。聖徳太子が物部守屋を御討伐の時この地で両軍が大激戦を演じた。守屋の軍勢は強く太子軍は非常に苦戦に陥り太子の御身は危くなった。丁度その時路傍に大きな椋の木があったので、太子はこれに身を避けられ無事に難を免れた。太子はこれが大変喜ばれ、やがてこの地に伽藍を建立、神妙椋樹山大聖勝軍寺と名づけられたという。後数度の兵乱に伽藍は荒廃した明治21年の暴風に本堂は倒壊し全く旧観を失った。本尊は如意輪観音で室町初期の作と思われる。また、太子16才の聖容も奉安している。境内に老椋樹があり、付近には守屋の首洗池、守屋の墳がある。

大 聖 勝 軍 寺





### 常光寺(西郷)



常光寺山門

臨済宗南禅寺派に属する禅刹で、本尊が地藏菩薩であるから、古くから八尾地藏という方が広く知られ、日本3地藏の1に数えられ古狂言にも八尾地藏の一作がある。聖武天皇の勅願により行基が建立し新堂寺と称した。この地藏菩薩の本尊は弘仁年間に小野篁が彫刻したもので寛治2年に白河法皇は本尊の靈験を聞かれ御参詣の時人面舍利を奉納せられた。その後戦火に堂塔は大破荒廃し至徳2年7月、又五郎大夫藤原盛継はこれを旧に復した。明徳2年足利義満は当寺の住持通玄東堂に帰依し荘田、梵鐘、初日山及び常光寺の扁額を寄進した。これより旧号を改めて常光寺と称することになったという。天正17年には豊臣秀吉が病氣平癒のため米5石を寄進し、また慶安元年8月徳川家光、寺領17石2斗余を寄進し、引継き歴代將軍より御朱印状を賜わった。境内には八尾別当顯幸及び藤堂家臣71士の墓、八尾寺内村開発者森本行磐居士の供養塔がある。寺宝仏舍利、義満の扁額扁山氏三好氏の寄進状制札、応永の年の常光寺縁起、永正6年の勸進帳、嘉慶2年在銘の罫口などがあり例年8月24日に大施餓鬼会を厳修し境内では地藏踊という大盆踊が行われ、河内の一名物となっている。

### 竜華寺大門跡(植松)

竜華寺は称徳天皇が神護景雲3年10月朔日に由義宮へ行幸の節遊覧せられ、当寺へ塩30石施入れた事が統記に見えている。草創は奈良前期と思われる明らかでない。その後桓武天皇延暦19年に灯明料として若江郡の田1町5反を賜施されている。以後の竜華寺については史書では明らかではないが現安中小学校の辺に大門という地とその大礎石(唐居敷というべきもの)が2基田の中に千古の名残を留めていたが、32年に東側の石が掘り上げられてしまった。

### 木村長門守重成之墓(西郡)

墓は西郡北の辻北端にある。碑石高さ1メートル、台石高さ約60センチメートル、周囲3.6mで南面し、碑石は角であるが、殆んど円味を帯びている。この碑石は彦根藩士安藤長三郎次輝が、重成150忌辰に菩提のため建てたもので、この先祖安藤長三郎重勝こそは、重成の首級を挙げた人である。慶長20年5月6日豊臣方の将木村重成は若江に陣を布き、徳川方の側面攻撃に出た。徳川方の藤堂、井伊の両隊と西郡若江に激戦を展開し重成は藤堂隊を撃破し相当損害を与えたが、つづいて井伊隊の攻撃を受け戦の疲労と衆寡敵せず、遂に重成は庵原助右衛門城昌の槍にかかり落馬し、安藤長三郎重勝すばやくその首をあげた。家康がこの首を実見した時ゆかしい伽藍の匂がしたので重成の用意周到さを歎賞したのは名高い話である。大正8年大阪府がこの戦跡に「此の附近重成奮戦之地」の標石を建てた。





西郷墓地にある切支丹墓碑

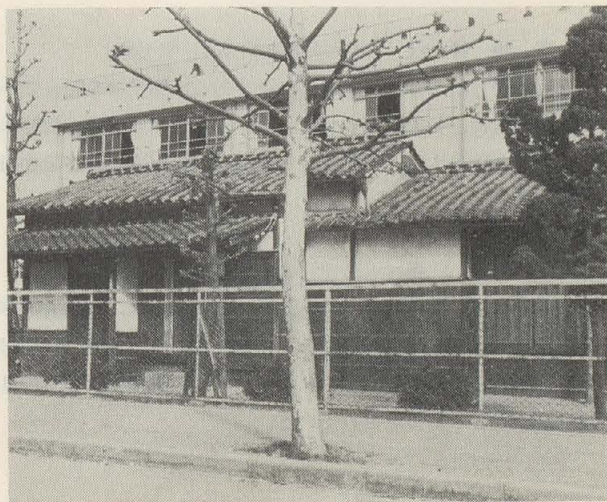
も、この土地だけは藪笹が繁茂していたようで、またこの地に次のような伝説が残っている。切支丹禁制の令厳しく教会堂も破毀せねばならなくなったのでその鐘をこの地下深く埋没したが、不思議や夜が更けると地下で鐘がうらめしそうに鳴り響いたといわれている。

#### 環山楼(本町)

八尾の豪族石田氏の設立した学舎で、その創立時代は明らかでない。享保12年に京都の碩学伊藤東涯も、この所に招かれて書を講じた。環山楼の名は高安山、をはじめ二上、金剛の連峰が遙かにこの楼を環って一望の裡に在って、景勝の亭館であるため東涯が名づけたものである。当時各地に郷学、私塾が創立せられ、宇野の含翠堂、久宝寺の麟角堂と共に、この環山楼が夫々学者を招いて、講筵を開き、世人の教導に資した。享保12年京都の碩学伊藤東涯が宇野の含翠堂に遊歴講説の時当地の石田利清その叔父利長、従弟可承、飯田通古などこの所に会してその来講を乞い講席を開いたのであったが、この席に受講した利清をはじめ、その弟孝鳳などよく郷民の教化に努めた。翌々14年伊藤東涯はこれを偲び深い感慨の裡にこの楼記を贈った。利清は当時21才で字は嘉右衛門義菴と号し賢明智策の才であり、弁舌を能くしその識才は郷党の間に名高く、郷土の子弟などはその徳風学識を慕って教を乞い私淑する者多く、また俠風があって理非曲直を弁ずるのに厳正無私であったので人々再び争うことができなかつたという。また知名の学者を招いて講席を試け、或は共に書を繕いて講席を設け、或は共に書を繕いて郷里の馨饌となった。宝暦14年5月59才で没した。

#### 高安山(高安)

別名を鉢伏山といって市の東端、奈良県に接する所にある。昔から烽山として大和の都の守りにはなくてはならぬ山であった。西の海(大阪湾)の様子の見張所でもあり、一旦事がある時は烽火を挙げて大和に報じたと伝えられている。しかし元明天皇の和銅5年正月、遂に取止めとなったと伝えられている。



環山楼(本町)

#### 切支丹墓碑(西郷)

以前西郷共同墓地に一見舟底型の碑があつた。高さ1メートル、幅56センチメートル、厚さ約25センチメートル、表は平面で大体円味をしてその先端がやや尖っている。その上部に大きな十字架、下に横書でIHS、またMANTIOとあり、右側に天正10年壬午左に5月25日と刻んである。この頃は我国キリシタンの最盛期で墓碑は他所にも発見されたが、大体は板碑型立石か蒲針型置石で年代的に見ても元和、慶長期のものが多い。然るに本碑は舟底型で時代も一層古いので学界ではこれを珍重し重要美術品に指定された。若江城主三好義継の重臣池田丹後守は織田信長が若江城を陥れた後は信長の臣となり、若江、八尾両城の守護の任にあつた。この人は永禄6年洗礼を受けてドン・シメオンと名のついた程の篤信者で家臣も亦大多数信者になったらしく当時八尾には大多数の信者があり、教会堂を設けて盛に集会していた事は明らかである。八尾では古くからパテレン屋敷という約600平方メートルの地域があり、明治初年頃までは周囲に家が建って



頂上からは、大阪、六甲、神戸などが一望の下に望められ、昭和33年4月決定をみた金剛生駒の国定公園の一連として、市ではその山麓一帯の総合開発計画を進めている。

### 恩智神社(恩智)

社伝によると創建は白鳳の頃で、最初は天兒屋根命を祀っていたが、奈良時代に枚岡に奉遷して、大御食津彦、大御食津姫を祀った。この神は食物を司る神である。この神社はもと天王の森に鎮座していたが、恩智左近が城を築くとき足下に神を見下すのをはばかり、今の場所に奉遷したと伝えられている。

文徳天皇の嘉祥3年10月に贈正三位、清和天皇貞観2年正月27日に贈従二位とあって、朝廷の信仰があつかった。

### 恩智神社の夏祭り

### 神宮寺感応院(恩智)

恩智神社の神宮寺である。一名三宅寺ともいわれ、明治維新の際分離して1寺となったという。本尊の11面観音立像(木造)は元国宝に指定を受けていたが、現在は実業文化財に指定されている。このほかに平安時代のもとの推定される大幅の弘法大師像がある。護摩の煙にすすけて全貌が明らかでないが、一部にはみごとな切金が散らばり輝いている。また室町時代の足利絹に描かれた観音像もあり、今も尊い姿をとどめている。



### 高安城趾(高安)

天智天皇が5年に高安山に行幸あって、この間の風光絶佳と大和の守りとして好適の地であることを考えられ、ここに城を築かれたのである。当城は国の守りと共に畿内の上税の貯蔵所にも利用され穀類、塩の保管に当たった。しかし夏から秋にかけて台風が甚しいので度々修理されたようである。天智8年8月に城を修理。持統3年10月天皇行幸。文武2年8月城を修理。同年9月城を修理。同大元年8月遂に高安城を廃止した。しかし次の元明天皇和銅5年に天皇高安城に行幸したとあるから城の役目はなくなったが、城そのものは残っていたようである。その後の史書にはこのことが出ていない所からみると自然に朽ちて倒壊したものであろう。後年、永禄年間松永久秀ここに要塞を築いて信長の軍を悩ましたという。

### 玉祖神社(神立)「祭神玉祖命。明王命」

十三峠の登り口に在り、王造氏の祖である櫛明玉命を祀っている。高安大明神または、高安明神とよばれ、付近12部落の氏神として崇敬されている。ここには元当社の御神体であり玉祖宿禰夫婦を表現したと思われる男女2体の神像が保存されている。また境内に大樟があり天然記念物の指定を受けている。延喜式によれば和銅3年の創建である。

### 菟光寺(玉祖神社の神宮寺)

真言宗、本尊は千手観音で彦演僧正の作といわれ、彦演僧正があるとき玉祖の神を夢に見、神体を刻んだこれが千手観音である。寺宝に北条時政の制札がある。文面には「河内国菟光寺者、鎌倉段御祈禱所也、於寺並田島山林甲乙人等不可有乱入妨之状如件」とある。文治元年12月の日付があり元国宝の指定を受けていたが、現在では重要文化財として指定されている。



### 十 三 峠 (神 立)

神立から奈良県に至る峠の傍に十三塚があり、そのためこの名がある。昔は大阪から奈良へ出るにはこの峠か、暗峠を通るか、或は大和川の岸を通るのが普通であった。その中でもこの峠が竜田や法隆寺に出るのに一番近い楽な道であったので通行人が絶えなかったという。今は木こりの他はあまり利用されていないが家族づれのハイキングコースとして信貴生駒縦走コースの中頃に位置していて峠の眺望はよい。



十 三 峠

### 水 呑 地 蔵 (神 立)

神立から十三峠への途中に石の地藏尊が祀られている小堂がある。昔、この峠が通行人の多かった頃、茶屋のあった所で、その茶屋には清らかな水の湧く泉があって旅人を喜ばせていた。その水が何時の頃からか薬水で脚気には大妙薬ということが伝えられ、地藏に詣でて、その薬水をもらい病人に与えるようになり、今も参詣人が多い。付近には桜が数十本樹えられていて春は花見客でにぎわっている。



由 義 の 宮 跡

### 由 義 の 宮 跡 (八尾木)

称徳天皇は弓削郷に行幸され、この土地の美しさを愛されここを中心に都を造ることを命ぜられた。大和・若江・高安の3郡に亘る広大な土地が開かれて由義宮が造営された。そして河内職が置かれた。これを西京という。宝亀元年正月、河内職に命じて土地の70才以上の老人をねぎらわれた。間もなく天皇は崩御されて由美宮は僅かに6年の期間でなくなったという。

### 五 条 の 宮 跡 (田井中)

田井中の北部にある小さい塚でささやかな祠がまつられている。元、田井中の部落がこの地にあったといわれている。度々の大和川の氾濫に田井中は今の地に「村づくり」をしたのであろう。奈良朝の頃には竜華寺に相当する大きな寺があったと想像される。この地から掘り出された礎石、土器、古瓦等により当時を偲ぶことができる。

その境域に郷民の産土神として五条神社が祀られ、これを中心にかなり大きな部落がいたとされたことが窺われる。今も五条千軒という言葉が残り、地名に五条垣内、大門、段の下等呼ばれる地が3,000平方尺以上に上っていることによっても知れる。明治の晩年まで直径2尺に及ぶ銀杏の大木や老松があって、昔の宮跡の名残を留めていた。かの天保の義士大塩平八郎の同志の筆頭、渡辺良左右衛門の自刃の跡がある。



# 名簿篇

## 市長

順位	氏名	就任	退職	備考
初代	脇田幾松	昭23.5.10	昭27.5.9	三ヶ町村合併により任期1年を残し退職
2代	脇田幾松	昭27.5.10	昭30.4.14	
3代	脇田幾松	昭30.4.30	昭34.4.29	
4代	脇田幾松	昭34.5.2	昭38.4.30	
5代	大橋清治	昭38.5.1	現在	

## 助役

順位	氏名	就任	退職	備考
初代	森倉政治	昭23.6.1	昭25.1.31	収入役へ 2人制となる
2代	森倉政治	昭23.12.25	昭27.12.24	
3代	森倉政治	昭27.12.25	昭31.12.24	
4代	熊又藤敏夫	昭30.11.1	昭34.10.31	
5代	熊又藤敏夫	昭34.11.1	昭38.6.10	

## 収入役

順位	氏名	就任	退職
初代	森倉政治	昭25.2.1	昭29.1.31
2代	森倉政治	昭29.2.1	昭33.1.31
3代	森倉政治	昭33.2.1	昭37.1.31
4代	吉田次良	昭37.4.1	現在

## 市議会議員

順位	氏名	就任	退職
初代	辻村乙三	昭和23年5月14日	昭和24年3月12日
2代	"	" 24. 3. 12	" 25. 3. 5
3代	今村安善	" 26. 3. 5	" 27. 5. 5
4代	石田安善	" 27. 5. 16	" 28. 3. 10
5代	"	" 28. 3. 10	" 29. 3. 10
6代	"	" 29. 3. 10	" 29. 10. 8
7代	羽多野与久	" 29. 10. 8	" 30. 2. 5
8代	谷口安吉	" 30. 2. 5	" 30. 4. 12
9代	"	" 30. 5. 13	" 31. 5. 8
10代	羽多野与久	" 31. 5. 8	" 32. 4. 27
11代	"	" 32. 4. 27	" 33. 4. 18
12代	"	" 33. 4. 18	" 33. 7. 23
13代	谷口安吉	" 33. 7. 23	" 34. 4. 29
14代	松村安富	" 34. 5. 22	" 35. 5. 25
15代	羽多野与久	" 35. 5. 25	" 36. 5. 27
16代	"	" 36. 5. 27	" 36. 11. 21
17代	谷口安吉	" 36. 12. 20	" 37. 5. 11
18代	"	" 37. 5. 11	" 38. 4. 29
19代	畑中正一	" 38. 5. 24	現在

## 市議会副議長

順位	氏名	就任	退職
初代	松村富藏	昭和23. 5. 14	昭和24. 3. 12
2代	"	" 24. 3. 12	" 26. 3. 5
3代	石田善硯	" 26. 3. 5	" 27. 5. 5
4代	羽多野与久	" 27. 5. 16	" 28. 3. 10
5代	"	" 28. 3. 10	" 29. 3. 10
6代	"	" 29. 3. 10	" 29. 10. 8
7代	川畑浅次郎	" 29. 10. 8	" 30. 2. 5
8代	高木金一	" 30. 2. 5	" 30. 4. 12